

# 思春期に交代人格を呈した症例における臨床的特徴

平川 清人<sup>1)2)</sup> 浦島 創<sup>2)</sup> 永井 宏<sup>2)</sup>  
西村 良二<sup>2)</sup>

1) 伊敷病院

2) 福岡大学医学部精神医学教室

**要旨：**近年「多重人格障害」をテーマとした小説がベストセラーとなりマスコミやメディアを主導とし多重人格障害に対する関心は高まっている。また多重人格障害と児童虐待との関連が示唆されているため、社会的にも多重人格障害に関する認識は高まっているといえよう。今回我々は1999年4月から2003年3月までに福岡大学病院精神神経科の外来を受診した20歳以下の患者465名のうち交代人格を認めた7名を対象に調査を行ない、次のような結果を得た。また副人格の役割については思春期における心理的発達課題および Kluft の理論より論じた。1. 7例中5例は解離性障害、1例は離人、現実感喪失症候群、1例は統合失調症であった。2. 解離性障害の5例における特徴として情緒的交流の乏しい親子関係がみられた。3. 主人格と副人格の人格間のつながりを認めた。4. 副人格は主人格の怒りや自分を正当に評価して欲しいという思いや気持ちを語る傾向を認め、主人格の代弁者の役割を担っていた。5. 力動的精神医学を念頭においた支持的個人精神療法により比較的短期間で人格の統合がみられた。6. 副人格の語る内容を傾聴することで、治療者と患者の信頼関係を高める効果をもち、治療の進展につながると考えられた。

**索引用語：**思春期精神医学, 多重人格障害, 交代人格